

〔第6回〕

NCGG-RI 研究発表会

National Center for Geriatrics and Gerontology, Research Institute

老年歯学研究の現状と展望

口腔疾患研究部 口腔感染制御研究室

渡邊 裕 室長

2016年2月9日(火) 16時00分

第1研究棟2階大会議室

1989年に8020運動、つまり80歳で20本の歯を残すという国民運動が開始されました。当初8020を達成している高齢者の割合は10%に満たない状態でしたが、四半世紀が経った現在では、8020達成者は50%に達すると推測されています。しかし、多くの歯が残っていても食べることができないものが増え、食欲が低下し、バランスの良い食事を摂ることができず、低栄養、代謝の低下、サルコペニアを引き起こし、要介護状態に陥ったと思われる高齢者が増えてきています。そのような状況のなか2015年にオーラル・フレイルの予防という新しいスローガンが日本歯科医師会から発信されました。これは歯科医療の目的が歯を残すという形態の維持から口腔機能の維持へ転換していくという方向性を示唆しているものと思われます。

昨今の老年歯学研究も口腔機能に関する研究が増加してきており、全身と口腔機能を関連付ける知見が得られてきています。そこで今回の発表では、私達の研究チームが行ってきた、口腔機能に関する研究成果を提示しながら、老年歯学研究の現状と展望について紹介させていただきます。

座長：今井 剛